

源氏物語

花散里

紫式部

青空文庫

橘たちばなも恋のうれひも散りかへば香かをなつ

かしみほととぎす鳴く (晶子)

みずから求めてしている恋愛の苦は昔もこのごろも変わらない源氏であるが、ほかから受ける忍びがたい圧迫が近ごろになってますます加わるばかりであつたから、心細くて、人間の生活というもののからのがれたい欲求も起こるが、さてそうもならない絆ほだしは幾つもあった。

麗景殿れいけいでんの女御にようごといわれた方は皇子女もなくて、院がお崩れかくになつて以後はまったくよりない身の上になつていたのであるが、源氏の君の好意で生活はしていた。この人の妹の三の君と源氏は若い時代に恋愛をした。例の性格から関係を絶つこともなく、また夫人として待遇することもなしにまれまれ通つていたのである。女としては煩悶はんもんをすることの多い境遇である。物哀れな心持ちになつてこのごろの源氏は、急にその人を訪とうてやりたくなつた心はおさえきれないほどのものだったから、五月雨さみだれの珍しい晴れ間に行った。目だたない人数を従えて、ことさら簡素なふうをして出かけたのである。中川辺を通

つて行くと、小さいながら庭木の繁りしげのようななどのおもしろく見える家で、よい音のする琴を和琴わこんに合わせて派手はでに弾く音がした。源氏はちよつと心が惹かれて、往来にも近い建物のことであるから、なおよく聞こうと、少しからだを車から出してながめて見ると、その家の大木の桂かつらの葉のにおいが風に送られて来て、加茂の祭りのころが思われた。なんとなく好奇心の惹かれる家であると思つて、考えてみると、それはただ一度だけ来たことのある女の家であつた。長く省みなかつた自分が訪ねて行つても、もう忘れているかもしれない。いがなどと思ひながら、通り過ぎる気にはなれないで、じつとその家を見ている時に杜ほとときすとときすが啼ないて通つた。源氏に何事かを促すようであつたから、車を引き返させて、こんな役に馴なれた惟光これみつを使いによつた。

をちかへりえぞ忍ばれぬ杜鵑かきねほの語らひし宿の垣根に

この歌を言わせたのである。惟光がはいつて行くと、この家の寢殿ともいうような所の西の端の座敷に女房たちが集まつて、何か話をしていた。以前にもこうした使いに来て、聞き覚えのある声であつたから、惟光は声をかけてから源氏の歌を伝えた。座敷の中で若

い女房たちらしい声で何かささやいている。だれの訪れであるかがわからないらしい。

ほととぎす語らふ声はそれながらあなおぼつかな五月雨さみだれの空

こんな返歌をするのは、わからないふうをわざと作っているらしいので、

「では門違いなのでしょうよ」

と惟光が言つて、出て行くのを、主人あるじの女だけは心の中でくやしき思い、寂しくも思つた。知らぬふりをしなければならぬのであろう、もつともであると源氏は思いながらも物足らぬ気がした。この女と同じほどの階級の女としては九州に行っている五節ごせちが可憐かれんであつたと源氏は思つた。どんな所にも源氏の心を惹くひものがあつて、それがそれ相応に源氏を悩ましてゐるのである。長い時間を中に置いていても、同じように愛し、同じように愛されようと望んでいて、多数の女の物思ひの原因は源氏から与えられているとも言えるのである。

目的にして行つた家は、何事も想像していたとおりで、人少なで、寂しくて、身にしむ思ひのする家だつた。最初に女御の居間のほうへ訪ねて行つて、話しているうちに夜がふ

けた。二十日月が上つて、大きい木の多い庭がいつそう暗い蔭^{かげ}がちになって、軒^たに近い橘^{たちばな}の木がなつかしい香を送る。女御はもうよい年配になっているのであるが、柔らかい気分の受け取れる上品な人であつた。すぐれて時めくようなことはなかったが、愛すべき人として院が見ておいでになつたと、源氏はまた昔の宮廷を思い出して、それから次々に昔恋しいいろいろなことを思つて泣いた。杜鵑^{つばき}がさつき町で聞いた声で啼^ないた。同じ鳥が追つて来たように思われて源氏はおもしろく思つた。「いにしへのこと語らへば杜鵑^{つばき}いかに知りてか」という古歌を小声で歌つてみたりもした。

「橘の香をなつかしみほととぎす花散る里を訪ねてぞとふ

昔の御代^{みよ}が恋しくてならないような時にはどこよりもこちらへ来るのがよいと今わかりました。非常に慰められることも、また悲しくなることもあります。時代に順応しようとする人ばかりですから、昔のことを言うのに話し相手がだんだん少なくなつてまいります。しかしあなたは私以上にお寂しいでしょう」

と源氏に言われて、もともと孤独の悲しみの中に浸っている女御も、今さらのようにま

た心がしんみりと寂しくなつて行く様子が見える。人柄も同情をひく優しみの多い女御なのであった。

人目なく荒れたる宿は橘の花こそ軒のつまとなりけれ

とだけ言うのであるが、さすがにこれは貴女きじよであると思つた。さっきの家の女以来幾人もの女性を思い出していたのであるが、それとこれとが比べ合わせられたのである。西座敷のほうへは、静かに親しいふうではいつて行つた。忍びやかに目の前へ現われて来た美しい恋人を見て、どれほどの恨みが女にあつても忘却してしまつたに違いない。恋しかつたことをいろいろな言葉にして源氏は告げていた。嘘うそではないのである。源氏の恋人である人は初めから平凡な階級でないせいであるか、何らかの特色を備えてない人は稀まれであつた。好意を持ち合つて長く捨てない、こんな間柄でいることを肯定のできない人は去つて行く。それもしかたがないと源氏は思っているのである。さっきの町の家の女もその一人で、現在はほかに愛人を持つ女であつた。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kumi

2003年7月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

花散里

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>